

## 第2部パネルディスカッション 「大学教育としての社会学」をめぐる

▶**司会** それでは今から第2部を始めたいと思います。

▶**安藤文四郎** それでは、冒頭に司会からお話がありましたように、これまで本日の落合先生の講演会を含めまして、全部で4回の講演を連続学術講演としてやってきたわけですが、その講演の内容も踏まえながら、50周年記念学術講演会の基本的な問題意識でありました「大学教育としての社会学」というテーマをめぐる、残った時間でディスカッションをさせていただきたいと思います。

最初に時間配分をお話ししたいと思いますが、少し遅れて始まっておりますけれども、一応1時間弱という予定で考えております。冒頭、私のほうから、司会役でもありますので、共通の認識となるような、ある種の問題設定といいますか、そうした話をさせていただきます。そのことをめぐる、あるいはそこから少し離れたことでも構いませんけれども、お三方から約5分ぐらい、それぞれご自分の問題意識をお話しいただこうというふうになっております。それで大体30分ぐらいになるかと思います。その後の時間ですけれども、フロアの皆様方からも質問を受けて、質疑応答したいと思いますので、ど

うぞご遠慮なく、どなたかを指名してだれそれに質問したいということでも結構ですし、あるいはそれまでのディスカッションを踏まえた質問なり意見でも結構ですので、どうぞ積極的にフロアからのご意見をいただきたいと思います。最後にまとめるということではできませんけれども、若干、私のほうからコメントをして締めくくるといふ、そのような段取りで考えておりますのでよろしくお願いたします。

それでは、最初にメンバーを少し紹介をさせていただきます。ここに来ておられる方は社会学部の方々が大部分なので、紹介の必要もないかもしれません。しかし、外部の方、それから他の学部等からもおいでの皆さんもいらっしゃると思いますので、簡単ですけれども私のほうから紹介させていただきます。

発言をお願いする順番で申し上げます。まず田中耕一先生でございます。社会学部教務主任をなさっておられまして、その関係で、現在、社会学部が直面しているさまざまな教務上の問題、また教育上の問題であろうかと思っておりますので、そういったことにも触れていただきたいと思っております。ちなみにご専攻は社会学原論、あるいは社会学史ということでご研究をなさっております。

それから奥野卓司先生です。奥野先生も以

前に教務主任をされまして、2代にわたる教務主任においでいただいたわけですが、同じく現在、一社会学部教員として、社会学部が直面してる教育上の課題等、お話しただければと思います。またご専門は情報社会学ということですが、そういう観点からも何かお話しただければありがたいと思います。

このシンポジウムでは落合先生はゲストスピーカーというような、そんな役どころになるかと思いますが、社会学部の事情はご存知ないわけですので、あまり社会学部の話をしても落合先生のコメントが難しかろうと思いますが、しかし同じような問題は京都大学にもあろうかと思しますので、京都大学の例なども踏まえて、またアジアの大学との交流もなさってますので、アジアの大学の現状などもお話しくださいありがたいと思います。

それでは私のほうから簡単に全体のディスカッションの前提になるようなことを少し話したいのですが、しかし今、落合先生から本当に興味深い講演をしていただきまして、その講演を聞くなかで、社会学部における研究及び教育のあり方というのが、おのずから我々にも伝わってきたと思うのです。大変おもしろいお話で、多分今日の講演のようなお話を学部の授業とか、あるいは大学院の授業でお話になっても、学生の皆さんは非常に興味を持って目を輝かせて聞くのではないかと思います。私も目を輝かせて聞かせてい

ただいたひとりです。先生のこれまでの研究の出発点から今日までの歩みをお話しになったわけですが、まず取り上げておられる問題、あるいはテーマというのが非常に現実感のある、リアリティーといえましょうか、現実性のある問題を取り上げて研究してこられたということがよくわかりました。しかもその研究の過程でいろいろな新しい発見をなさって、ご自分自身が驚いたと何度も言っておられました。ですから非常にエキサイティングな研究の過程をこれまでご本人がエキサイトしながら歩んでこられたという、それは研究者として本当にそうであるべきであり、羨ましいと思うのであります。

また、その新しい事実の発見を踏まえて、自分の問題意識をより拡張したり、あるいは国家や社会のあり方までも含めた分析の枠組みも変えていくという形でご自分の研究テーマもまた広げていかれたということでした。そのようにご自分が生き生きと興奮しながら研究をして、その結果を大学なり大学院の授業で話すという、そのことにある意味で社会学の教育というのは尽きるのではないか。それがリアリティーを持った社会の現実を反映する





ものであれば、もうそれにある意味で尽きて  
いると思うのですけれども、そうは言いま  
しても、今日のテーマについての討論はこれ  
で終わり、というわけにはいきませんので、  
これまでの社会学部の50年の歩みを多少とも  
振り返りながら、これからの半世紀に向けて、  
我々社会学部の教員が何を心して、あるいは  
目標にして、教育なり研究なりを考えてい  
たらよいかということを少しディスカッシ  
ョンさせていただいて、何がしかのヒントに  
していただければ、それで十分目的は果た  
したのではないかというふうに思います。

受付のほうでお配りした資料があります  
ので、それも見ていただきたいのですが、そ  
この冒頭に年表のようなものを書いてござい

す[資料-1]。この社会学部が設立したのは  
1960年ですから、1960年のことは書いてご  
ざいませんが、1960年という、我々の世  
代ではだれもが思うのが日米安全保障条約を  
めぐる政治的な大きな事件があった、そうい  
う年です。そのことをすぐ思うかどうかで年  
齢や世代がわかるかと思うのですけれども、  
その60年代、最後の69年に、その60年代  
の末に大学紛争が燃え盛りまして、69年  
には安田講堂事件というのがございました。そ  
のころの4年制大学への進学率が15.4%ぐ  
らだったのです。それでも当時の学生にと  
ってはある種、大衆化した状況がありまし  
た。私などがその当事者世代に当たりますが、  
当時はマスプロ教育ということが盛んに言  
われまして、大教室で先生がマイクを使っ  
てひたすらしゃべって、学生はひたすらノ  
ートをとるような、そういう授業のあり方  
も含めて大学のあり方についていろい  
ろな問題提起があったと思うですが、そ  
のころの進学率が15.4%でした。

社会情勢とは申しますと、そこにも書い  
てありますが、日本が高度成長の時代にあり  
まして、1973年に世界的なオイルショック  
というのがあり、一旦経済の歩みが大きな  
転換期を迎えますが、日本はそのオイル  
ショックを比較的速やかに乗り越えたと  
言われています。それに対して欧米の国々  
は、このオイルショックをきっかけに  
かなり長期の不況、経済停滞に悩むこと  
になります。しかし、その

シンポジウム (2010.11.24)資料

「大学教育としての社会学」には何が求められているのか？

問題設定：急速に変化する世界、八方塞がりの日本  
いま、大学と大学教育に何が求められているか？ 何が出来るのか？  
(キーワード：大学教育、社会学、グローバル化)

世界	日本	日本の大学
	1969年	安田講堂事件 *4年制大学への進学率 16.4%
1973年 オイル・ショック	「モロトリアム人間」(小此木啓吾 1977) 『ジャパン・アズ・ナンバールン』(エズラ・ヴァーグダ 1979)	
1980年代 欧米諸国の経済停滞、失業者増大 「ステータス・ゼロ」の若者急増 (「若者世代の没落」宮本みち子) “新自由主義”の台頭 中国、改革開放路線へ	昭和天皇崩御、平成に改元	18歳人口 200万人超 *4年制大学への進学率 24.7%
1989年 天安門事件 ベルリンの壁崩壊 (東欧民主化)	1990年 「バブル崩壊」 → 経済停滞 1995年 阪神・淡路大震災 パソコンの普及が始まる	
	1997年 大手金融機関の破綻、リストラ本格化、デフレ経済へ 1999年 インターネットの利用者増大 「少子・高齢化」・「未婚・晩婚化」	*4年制大学への進学率 38.2%
2001年 「同時多発テロ」事件 2008年 リーマンショック後の同時不況	小泉政権(-2006年)	
	2009年 民主党政権	18歳人口 121万人 *4年制大学への進学率 50.2%
	縦横寸前？ 医療・介護・年金 大学教育は？	志願者に対する入学者の割合91%
2010年 新東西冷戦の前夜？ 人口70億の中での 「グローバル化」？ 「グローバルイゼーション」		

資料-1

原因は単にオイルショックだけではなく、これは私の意見になるかもしれませんが、実は日本製品、メイド・イン・ジャパンの製品がヨーロッパ、特にアメリカ市場を席卷しまして、安価でかつ質のよい日本商品が、ちょうど現在の中国や台湾の商品がそうであるように、先進国の市場を蚕食していったわけです。それが先進国の経済に大きな動揺をもたらしたという事実があったと思います。

今日、我々、大変な経済的な難局に直面していますが、立場が変わって、当時の日本のような立場にあるのが現在の中国であろうと言えると思います。ですから、そういう意味でのグローバル化というものは1970年代あたりから第1波として、その震源地は主として日本、それからやがて韓国、台湾という国々でありました。それが今日では中国がその震源地として先進国の市場に対して大きな役割を果たしている。そしてまた大きな意味での混乱、ある意味での停滞をもたらしていると言えるかと思いません。配布資料のなかの世界の輸出額に占める中国の急激な上昇ぶりとしてデータを記載しています[資料-2]。

さて、日本社会はオイルショックを割合とスムーズに乗り切りまして、そのことが世界から注目されて、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」というような、えらく褒められたりした時代がこの時代です。また一方、国内ではそのような安定の時代を反映いたしまして、

モラトリアム人間というような、これは若者に対する一つの分析として若者のあり方、またその精神的な姿を描く一つのキーワードとしてモラトリアム人間ということが言われたりしました。

一方、欧米では先ほども言いましたように第1波のグローバル化が実は起こっておりまして、そこで生じた事態というのは現在の日本で生じている事態を先取りしたものであって、とりわけ若者世代の無業者や失業者が増えるということでありまして、そこには「ステータスゼロ」=社会的な役割が何もない若者たちが広く見られるような時代が、既に1980年代にあったのです。やがて中国の改革開放路線が、1980年代の終わり

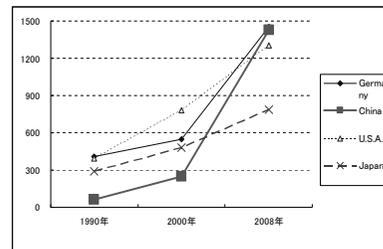
◆ 主要国の輸出額 (上位10ヶ国)

(単位:10 億ドル)

2008年 順位	国名	1990 (a)	2000 (b)	2008 (b)/(a)	(b)/(a)
	World	3,449	6,365	15,989	4.64
1	Germany	410	550	1,451	3.54
2	China	62	249	1,429	<b>23.01</b>
3	U.S.A.	394	782	1,301	3.31
4	Japan	288	479	786	2.72
5	France	217	301	599	2.76
6	Italy	170	240	545	3.20
7	Netherlands	132	213	541	4.11
8	Belgium	n.a.	188	477	-
9	Russia	n.a.	106	472	-
10	U.K.	185	282	460	2.49

(財)国際貿易投資研究所

(単位:10 億ドル)



資料-2



と思いますが、でも一応、簡単に見ておきたいと思います。2009年度からカリキュラムが変わりました。いろいろな点で変わったのですが、一つだけ取り上げてお話すると、これまでの社会学部のカリキュラムが持っていた特徴を拡張したというか、そういう側面が非常に強くあります。僕は1995年に関学に来たのですが、そのときに感じたことは何かというと、カリキュラムとか教育の面で、これは必ず勉強しなきゃいけないとか、これは必ず教えなきゃいけないとか、そういう制約があまりない、いい意味でも悪い意味でも緩いカリキュラムだということです。それは今日の冒頭の挨拶で宮原学部長も言いましたけれど、現在では650人という非常に多くの学生を抱えています。そうなる以前の福祉学科があった時代でも475人の社会学科の定員があったので、それでも十分多いわけです。そうなってくると、小さな規模の大学で、狭い意味での社会学をきちんと教えていくというか、そういうことははなからできない、そういう感じが非常にしました。それはもちろん悪い側面もありますが、いい側面で言えば、これは落合先生も言いましたけど、やはり社会学の持っている自由さとか、いろいろなことができる、何をやってもいいというのは大袈裟かもしれませんが、これをやらなくてはいけないということはなくて、いろいろなことができちゃう。そういういい側面も、もちろん持っていたわけです。

そういう緩やかさというか、多様性というか、それぞれの個性に任せるというか、何でも自由にやっていいよというか、イメージで言うと、そういうカリキュラムであったように思います。2009年度からのカリキュラムは、それに輪をかけたというか、そういう感じのカリキュラムになっているわけです。僕もカリキュラムの改訂には深く関わったので、今感じていることは、その反動といえますか、反動としてどうももう少し社会学教育の標準というか、最低ラインというか、コアというか、やっぱりどうもそういうものを少し考えないと、あまりにばらばらになりすぎて、ちょっと収拾がつかないのではないかという気が、今非常にしています。今、大学は2008年の12月に出された中教審答申にもすごく振り回されていて、「学士力」などということの問題にされているわけです。「学士力」というのは、本来は、学部を超えて学士課程教育で共通に身に付けるべき能力のことをいうわけで、そういう意味では、ちょっと矛盾していると思いますが、いろいろな専門分野では、もう分野別学士力などという話がどんどん進んでいて、多分、僕も詳しくは知りませんが、社会学会あたりでもきっとそういうことを議論しているのだろうというふうに思います。

だから、それが必ずしも全面的にいいとは思いませんが、関学社会学部の教育ということを考えていくと、確かにそういうある種の

標準というか、コアというか、そういうものも押さえておかないと、ますますこれから先を考えたときに教育が立ち行かなくなるのではないかと感じています。もちろんそれ自体が売り物になるわけではなくて、それがあった上に、これだけたくさん教員、それからいろいろな専門分野の専門家を抱えているわけですから、それを踏まえたいうでの多様性や個性というものが必要ではないか、と思っています。

では、標準とかコアを考えるとときに、どういうものが果たして現代の社会学の標準やコアであり得るのかということが、まず問題になります。社会学は自由でいいという意味では、そんなものはないほうがいいという意見ももちろんあるわけですが、仮に必要なものであると考えるとすると、どのあたりがポイントになるのかということのを少し考えてみたいと思います。これが二番目の話なのですが、先ほど安藤先生が説明してくださった日本社会の変化、変動を考えたときに、では何が今、標準やコアを考えるとときのポイントになるのかを少し考えてみたいということです。

安藤先生の先ほどの話ですと、1989年、あるいは90年あたりが大きな境目ということでした。それは多分、日本の場合にはかなり当てはまるのですが、世界的に言うと、あるいは先進国で言うと、大きな境目はむしろ1970年代ぐらいに設定されているのではないかと、と思います。先ほどの落合先生の講演

で最後のほうに、First Modernity と Second Modernity という概念が出てきましたけれど、こういうのも大体1970年代ぐらいを境に、もっと細かく言えば73年があるわけですが、そのあたりを境目に言われることが多いと思います。つまり、そういう先進国の変化と日本の変化とは、少しずれてしまっているわけです。まさに1980年代、むしろ日本は非常に繁栄してしまうということが起こるわけです。ほかの先進国はもうみんなダウンしてるのに、日本だけなぜか繁栄してしまうということがあって、それでそういった意味では、変な言い方ですが、ようやくほかの先進国並みにダウンしていくのが90年代を境目にしたそれ以降、先ほど安藤先生がおっしゃった90年代以降という、そういう感じになるのかなというふうに思います。

それでは80年代と90年代以降というようなことを考えたときに、割と有名な話としては80年代を「虚構の時代」というふうに呼んだり、90年代後半以降を「不可能性の時代」と呼んでる人も、ご存知だと思いますが、そういう人もいます。そのあたりの変化、つまり安藤先生がもともとおっしゃった90年



代あたりを境目にした変化で何が起きているのか。「不可能性の時代」というのは、僕は中身がよくわかってないのですが、「虚構の時代」というのは何となくよくわかる感じがするわけです。バブルで何かみんなウキウキしちゃったという、何かそういう時代ですよ。それが今度は急にしぼんでしまったというのが90年代以降、90年代の後半以降ということになると思います。

そういう意味で言うと、80年代というのは社会だとか自己だとか他者だとかというようなもののリアリティーというか、現実感覚みたいなものが割と薄れていくというか虚構化していく、そういう時代だったのではないかというふうに言われたりしてるわけです。それから今度は、逆にしぼんでいくわけですね。90年代後半以降の社会や自己や他者のリアリティー、つまり社会学が問題にするようなそういうリアリティーというのは逆に非常にしぼんでいきますので、収縮していったって何か非常に厚みがないというか、素朴なというか、あるいは「ベタな」というふうな言葉を使ってもいいのかもしれませんが、そういうリアリティーにしぼんでいってしまうわけです。そういう意味で言うと、今の若い学部生の持っている現実感覚というか、リアリティー感覚というのは、そのあたりに今あるのかなという気がするわけです。

そうすると、もう大分時間をオーバーしているんで簡単に言いますが、つまり何が言い

たいかという、社会学というのは、もともとどちらかという現実というものが実はいろいろな虚構に支えられていること、そういう点を明らかにしていくような、そういう側面を少なくとも部分的には持っている、あるいはそのような見方が社会学的思考のある種の特徴だと思います。そういう意味で言うと、いわば「虚構の時代」と社会学というのは割と相性がよかったのかもしれない。逆にリアリティーがどんどんしぼんでいって「ベタな」現実へと縮んでいくと、これは現実が社会学を追い越してしまったのか、つまり社会学はもう古い過去の遺物になってしまったのかもしれないのですけれども、社会学的なイマジネーションというか、そういうもので現実を見ていくということがなかなかできない。そういう時代になってしまっているのではないかと、という気がします。

そういう意味で、非常に使い古された言葉ではありますが、そうしたイマジネーション、イマジネーションを教育で教えるというのは、どうもちょっと矛盾してるようなところもあります。やはりそういうイマジネーションが今、時代のなかでどんどんしぼんでいけるとすると、やはりそのイマジネーションをいかに刺激するというか、喚起するというか、そういうあたり、それはもともと社会学が得意としているものだと思うのですが、そのあたりを考えていく必要があるのではないかと思います。これは例えば、教育方法の問



学生に教えて、ようやく撮ることができるようになりました。いろいろな問題があるわけです。例えば、学生たちがカメラ持っていますので、当然、撮った映像が外部に流出する可能性がある。YouTube やニコ動にすぐ出せるわけですし、それからさらに二次創作されてしまうわけだし、そうすると著作権の問題がどうなるのか、さらに被写体である映される側の人権はどうなるのか。それは権力関係ですからね。こうしたことは、「情報社会学」なり「メディア論」では必ず教えるんですよ。だけど実際、彼らはこんなふうにしてカメラを持つことによって初めて、本当に著作物を作るって大変なんだと気づく。全部を自分たちで企画して、自分で撮って、自分で映されたり映したりするという活動のなかから、実感をもってわかっていく。実際に今のところ、そうしたことの積み重ねのお陰で YouTube などには流れていないです。

僕はだから少なくとも学部では、今日も理論家の先生方に囲まれていて、田中さん、安藤先生、それから落合先生、こういう方々を社会学の「伝統芸術」だとすると、私は多分「色物」を担当しているのですが、私自身、社会学部の学部教育では、現代社会を考えるというか、学生さんが現代社会を考えるツール、自分の生き方を考える新しい方向を実感してもらえばいいなというふうに、思っているのです。もちろんそのなかで社会学の難しい理論を教えていただくことは必要で、それ

を学生さんに現実、自分の問題に引きつけて考えてもらえたらなど、そしてそれが彼らの将来に生きていったらいいな、というふうに考えてやっっていこうと思っています。

▶落合恵美子　すごく元気な映像を拝見して羨ましいなと思いました。京大は1学年が20人から30人ですから、やはりこの元気は出ないですね。わたしたちも教育に映像を取り入れているのですが、今拝見した映像はより迫力があって羨ましいと思いました。やはり時代が変わっていると思うのですよね。90年ぐらいでの転換というお話がありましたけれど、一つはやはりメディアが変わっているということがあります。少し前でしたらきちんと文章が書ける人間を育てることが大学教育において重要だったと思うのですが、今は文章はもう表現手段の一部でしかありません。やはり映像とか音とか、そういうもので何かを伝えられる人をつくるということも、本当に重要だと思います。その意味で、大学教育は遅れているところがあるのですが、関学はさすがだなというのが、今日の印象ですね。

表現の前のところで何をインプットするかということについても、やはり90年代以降、何か変わらなければいけないのだろうと思うのです。先ほど「虚構の時代」というお話がありましたけれど、日本社会のなかですごくリアリティーがありますけれども（それが怖いのですけれども）、あの枠組みを世界に持つ

ていった場合、オタク系の人には納得してくれるとしても、皆が納得するということはないでしょう。国外に出たらある世代が全部それで埋め尽くされてるということはないのです。最近、アメリカに行ったと言いますが、そのときにハーバードでメアリー・プリントンに会いました。メアリー・プリントンの専門は日本の若者研究です。近著は *Lost in Transition: Youth, Work, and Instability in Postindustrial Japan* (2010, Cambridge University Press) と言いまして、映画のタイトルのもじりのおしゃれなタイトルですけども、移行期にロストしてしまう、ロストジェネレーションのことで。よく似た内容で『失われた場を探して』(2008年、NTT出版)という日本語の本も出ています。そのプリントン先生がもう1冊『リスクに背を向ける日本人』(山岸俊男+メアリー・プリントン、2010年、講談社)という本を出されています。ワシントン大学の同級生だったという北海道大学の山岸俊男先生との対談です。その2人が日本のロストジェネレーションの若者について対談してるのですが、私、それを帰りの飛行機のなかで読んできて、あっと思ったところがあります。アメリカでは同世代の若者を何と呼んでるのかいうと、新ミレニウム世代と呼んでるそうなのですが、その世代の特徴は前向きなこと、楽観的なこと、社会はうまくいっていると思いき、これからますますうまくいくと思ってることなのだそう

です。私には、これはちょっと意外でした。これだけ戦争しているアメリカですよ。そこにいる若者が何でこんなに前向きなのだろうか。ただナショナリスティックに前向きというわけでもなくて、民族差別などの感覚が薄いのだそうです。だから結構、反差別であったりするようです。どうしてそうなってるのか、その分析まで読んでいませんから、何とも言えないのですが、でもこれは大きな事実ですね。同じ世代が日本に生まれたら「虚構の時代」だなんて思ってしまったり、後ろ向きのロストジェネレーションになる、方向を失ってしまう。ところがアメリカだったらすごく楽天的な世代になっているのです。何がこの違いを生むのだろうか。こうなると、やはり国内だけを見てはだめで、国内の若者研究だけをしていても日本の若者はわからないと思わざるをえません。日本の若者がなぜ世界のなかで特異的に引きこもっているのか。引きこもりの本も出ましたね、英語の本が。つまりそれは特別な研究の対象になるくらい特異な現象なのです。なぜ日本社会はこんな特異なのかを知るためには、ほかの国に行ってみないとだめです。ほかの国と比較



してみないとだめです。

それは、私が家族の調査でやってきたことでもあります。国際比較をすると私たちの常識が簡単に裏切られる。それはうれしいかたちで裏切られたりもするのです。私たちが出口がないと思っていることに対して、ああ、こんなところに出口があったのだというふうに見えたりする。だから外国に行くことをお勧めします。だから、もし私がこれだけの大きい人数の学生を抱えた社会学部にいたら、いつも3分の1ぐらいの人は国外に出られるようなプログラムを組むとか、そういうことがしてみたいですね。京都大学でもやってみたいと思っているのですが。夢ですけれど。あとは、放浪してくるのを支援するようなプログラムとか。今、ヨーロッパやアメリカでは大学卒業してすぐに就職しないそうですね。会場においでの方々は、新卒で就職しないとだめだって思ってませんか。それ、もう世界のトレンドじゃないのです。大体卒業前とか卒業後に1年ぐらい世界を放浪してくるという人が多いですね。友人のお子さんたちも結構そうです。アジア、ヨーロッパから地上をずっとやって来て、日本まで放浪してくるはずだったけれどインドで止まって・・・みたいな話があったり。そんな感じで経験をjする。何かを自分でつかんでくるという時間をちゃんとつくるということを、教育する側でも考えておいたほうがいいし、教育する側が考えてなかったら勝手にやってし

まえばいいのです、若い人は。

今の先進国の問題は、かつての日本のように中国などが出てきて、先進国が後退していくということです。落ち目になっていく国の人々は生活水準も下げられないから、安い労働で勝つというわけにもいかない。何か技術を身につけると言ってアクティベーションとか、再教育ということが言われるけれども、安い労働に勝てるほどの再教育というのは、それほど効果が上がらない。北欧でやっていて効果が上がっているといいますが、デンマークの人はそれほどでもないと言っています。

そうすると、自分で探さなければいけないのですよね、活路を。それを探すには、やはり世界を見てくることだと思います。世界を見ながら、いろいろとそういうことについて書いた本も読んで考えるということですが、まずは日本のなかだけを見ているということをやめる。出口はあると信じて世界を見る。そういうことが教育でできたらいいな、と思います。

▶安藤 お三方のご意見をお聞かせいただきましたけど、大変おもしろい、参考にもなったと思うのですが、これから4人の間で若干の時間、お互いの間で質疑応答といいますが、あるいはさらなる発言をお願いしたいと思います。今のお話を聞いていろいろなことを考えさせられたのですけれども、田中さんの発



ロッパの人を中心に、イギリスの思想家を初めとして、それではいけない、別の可能性もあるということさまざまな社会運動もあったし、社会制度も生み出されてきた。また福祉国家という今日でさまざまな行き詰まりを抱えてはいても、そういう理念も生み出してきたし、また一方ではより過激なたちで社会主義や共産主義という思想も生んできたのですね。そういう歴史が1世紀以上あるわけなので、その成果は何なのか、そこで我々の先人たちが悪戦苦闘してきた歴史とは何だったのかということをもう一度振り返って、今、むき出しのかたちで迫ってきているアメリカ的資本主義とは違う、資本主義を否定しようとしてもそれは無理ですけれども、それとは違うかたちの資本主義といいますか、別の市場社会というものもあるのではないかな。そんな話もできたらいいな、と考えております。

どなたでも結構ですけど、何かご自由に。

▶奥野 安藤先生、あえて僕から申し上げます。学生は現実を知らないというふうにおっしゃっているのですが、逆に彼らは現実をよく知っているからこそ、今のような状況なのではないですか。つまり、例えば学生は外国へ行かない。そのことがこの二、三日もすぐ新聞に書かれているわけです。だけど、これも、彼らが外国に行ったら本当は就職できないという現実があるわけです。これだけ就職活動が前倒しされて、学生はその厳しい現実をよく知ってい

るから、行かないわけですよ。

社会主義と資本主義の対立は、配布資料に書いてあるように、1989年まではあったわけですが、そこでソビエトが崩壊して、冷戦構造が少なくとも解体して以来、もう学生たちにとってコミュニズムは関係ないわけ。その関係ないなかで、では次の新しいものがあるかといったら、そんなものはないわけです。例えば昨日の朝日新聞にそう書いてあったし、それからの同日の朝日ニュースターテレビを見ていたら下村満子さんがおっしゃったのは、今年ハーバード大学に日本人の学生で留学した人は1人だけらしいです。中国人は300人以上。これはもう大変情けないことだと下村さんはおっしゃってるのです。だけど、ハーバード大学に行く、そして朝日新聞社に入る、そういう人生というのは本当にこれからの学生にとってよい人生なのだろうか、と僕などは考えるのです。つまりそれ、今日の朝日ニュースターは、随時、ニコニコ動画でもやっています。ニコニコ動画では、これにいろいろな書き込み（弹幕）があったけれど、そちらの学生の声の方がよっぽど僕には、新鮮に感じられた。よく現実を見ていると思いますよ、学生は。

▶落合 ニコニコ動画に何語で書くんですか、日本人だけが読むのですか。

▶奥野 たしかに、実はそこは問題ですよ。

日本語で書いてある。でも、今はもうニコニコ動画は、フランスの人たちがフランス語の動画もつくってるし、台湾の学生が中国語でもつくっている。これ今、一方に YouTube というのがあって、他方に ツイッター というのがあるわけですけど、これらが一緒になったものがニコニコ動画なのです。ここを一緒にしてしまうところが、日本の画像共有サイトのすごいところで、それにニュース・ストリームも加わって、ニコニコ動画では、今は生放送もやっているわけです。

それから僕、1989年というのは、ちょうどアメリカで、イリノイ大学の人類学部で日本社会を教えておりました、そのときにすごく衝撃的だったのは、その頃、CNNがものすごい勢いで出てきたのです。たとえば、天安門事件の時に、NHKで映ってない映像をCNNは最後まで撮って、放映していたのです。北京のホテルの部屋に、ハンディーのカメラを構えて、中国の官憲が乗り込んできて、そのカメラを押さえ込むところまでCNNは放送しつづけたのですよ。それが全米に流れた。だけど日本のNHKでは一切流れていませんでした。その頃、まだCNNは小さな放送局だったのですけれど。だけど他方で、僕の教えていたイリノイ大学の人類学部日本研究学科では、その頃、日本はバブル状態であったにもかかわらず、学部生の就職率は30%ですよ。これで大学としてやっていけるのかなど、僕はそのとき驚きました。僕はその前

は京都の小さな芸術短期大学におりましたが、こんな状況では芸術短期大学でもやっていけないですよ。だけど、アメリカでは文系の新卒就職率30%というのは当たり前。では卒業後にどうするのかというと、ほかへ出かけて行って勉強したり、地域のことをやったりして、また大学に戻ってこられる。そういうふうなかたちで社会にも受け入れるような地盤があるのです。日本はそうっていない。それはやはり、私たち、大人の責任なのですよ、若者の責任ではなくて。

▶落合 メアリー・ブリントンの本もそういう話になっていて、結局、リスクを若者がとらないのは、2度目のチャンスがない社会だからということ。だから、社会の側がそれをうまく用意できてないからだ。そのところに話を落としていましたね。私もハーバードに行けばいいとは思いませんけど、でも向こうでも、もう話題にはなっていました。何で日本からこんなにも来ないのだろうって。でも私、例えば上海とかに留学してもいいと思うのですよ。でも、もうちょっと外に出て行って、中国語と英語でニコニコ動画を送れたら、すごい発信力がありますよね。だから日本ですごいユニークな発想を今していると思うのだけれど、発信できてない。

▶奥野 でも、結構、中国とか韓国に留学してる日本人の若者は、今は多いですよ。だけ

ど社会学部には行かず、というかもともと社会学部は少ないので、映像系のところとか、コンテンツ系のところとかに行く日本の学生が結構多いです。逆に中国からもそういう分野には来ているでしょう。で、アメリカに行く学生だけを見たらとても少ない状況ですけど、中国や韓国との相互の行き来を見たら決してそうでもないのです。確かに全体としては外国に出る若者が少なくなっていますが。

▶**落合** ほかの国と比べたら、例えば韓国などでは卒業したら3分の1がアメリカへ行くとか、あと中国への留学もすごく流行ってます。だから、外国へ行く規模は日本は少ないのではないのでしょうか。

▶**安藤** それでは時間もありませんので、この4人での話は一旦ここで打ちだめにしまして、フロアの皆さんから自由に質問なり、あるいはご意見あれば承りたいと思いますの。手を挙げていただきましたら、そちらにマイクをお持ちしますので、どうぞ自由に発言お願いしたいのですけれど。

▶**陳立行** 社会学部の陳と申します。

日本の教育として社会学をどうすればいいか、いろいろ今、私、外国人の教員としてすごく興味深く聞きました。まず社会学部において、教育の内容、先ほど田中先生がコアのコースとか基本的なものの必要を提起されま

したが、実は社会の現実をつかむ、うまくつかむ、そうしたことができる人材をいかに育てるかということは、すごく重要ではないかと思います。

もう一つは、日本は今、エリート教育という言葉が何かタブーのように、だれも言わなくなっている。みんなが同じに、平等に進めていくという考えで、かえって私は今、自分のゼミの指導においては、少なくとも関学は社会をリードする人材を育てるというような学部の方針にならなければ、私のゼミのなかには社会をリードする社会人に、どの分野でもいいですよ、会社でもいいし、マスコミでもいいし、教員でもいいし、社会をリードできる人材を育てるというような目標を掲げられると、外国のことを他山の石として、多様な価値の体験とか、そうしたことも自然に生まれて、学生が育つのではないかと思います。

むしろ、私が聞きたいのは、学生を将来どういうふうに育てるのか、社会のなかでどの地位に行かせるのかということに関して、大学での教育のあり方が不明確ではないかと思います。私のような外国人の視点から見ていると、そんな印象を持ちます。どうでしょうか。

▶**田中** いろいろな話があって、奥野先生の話とか、いや、みんなよくわかるのですね。だから今、陳先生は現実をつかむという、そういう感覚というか能力というか、そういうことをおっしゃられて、さっき安藤さんと奥

野さんの間では、今の学生は現実を直視しないと書いた安藤さんと、それから奥野さんはむしろ今の学生は現実をよく見ているのだと言われた。つまり、さっき僕が、90年代以降、何か「ベタな」現実には収縮してしまっていると言ったのは、どちらかという奥野さんの言い方に近いんでしょうが、つまり現実がある意味でよくわかってしまっていて、だから安藤さんの言い方だと、もっと別の現実もあるというか、その別の現実を多分よくわかるには、落合先生がおっしゃったように、国内にいてはだめで、海外と比較するとか、そういうことがないとわからない。それは全くそのとおりで、そういうことを僕はイマジネーションという言葉で言おうとしたのです。ですから陳先生が今おっしゃった、現実をちゃんとつかむということも、やはり何か今ある現実をそのまま受け入れるということではないのだと思います。どんなほかの現実のあり方があるかとか、海外ではどうなのかとか、そういうことを含めて見たときにはじめて、今の例えばこの厳しい社会的現実の条件みたいなものを、そこでつかむことができるわけです。そういうイマジネーションの力、あるいは変な言い方ですが、今ある現実のもつリアリティーをいったん解除するような力がないと、実は現実をきちんと捉えられないのではないかと思うし、社会学はそもそもそういうことが得意なんじゃないかと言いたいわけです。そういう意味で言うと、そんなに違っ

たことは言っていないのではないかという感想です。

それから、落合先生が先ほどおっしゃった、学部の3分の1ぐらいが海外に行くというプログラム、これはなかなか難しいと思いますけど、現実にはそこまでできないにしても、そういう感覚をどう学生に伝えていくのかということが、すごく大事な点ではないかと思えます。

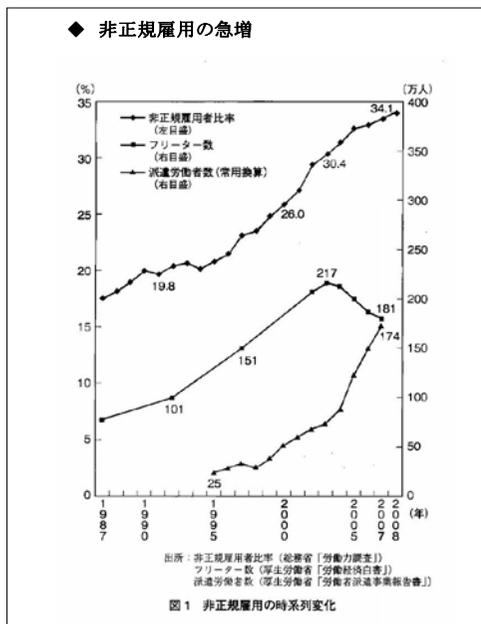
▶安藤 今の陳先生のご発言ですけど、おっしゃるとおりで、私も同じことを意図していたわけです。つまり、世相を見て現実を知れば知るほど若者たちは暗くなりますよね。気分も沈んで、自分の将来がそんなに明るく見えませんから、暗くなりがちなので、むしろどうやって彼らを励ますことができるかということ、この頃は考えるのですね。そのときに陳先生がおっしゃるように、自分が将来ある分野でリーダーになろうというような、アンビシャスな前向きな若者ができればたくさん育ててほしいと思っております。ただ、それを口で言うだけではなかなか難しいので、どうすればいいかということで、我々は知恵を絞らないといけませんが、本当にこれは関学だけの話ではなくて、日本の若者が内向き志向だとか、外国に対する関心を失っているとすることはよく言われるので、それは本当に社会的な問題だと思います。そのような状態を早く打破できるようにしてい

かないといけないと思います。

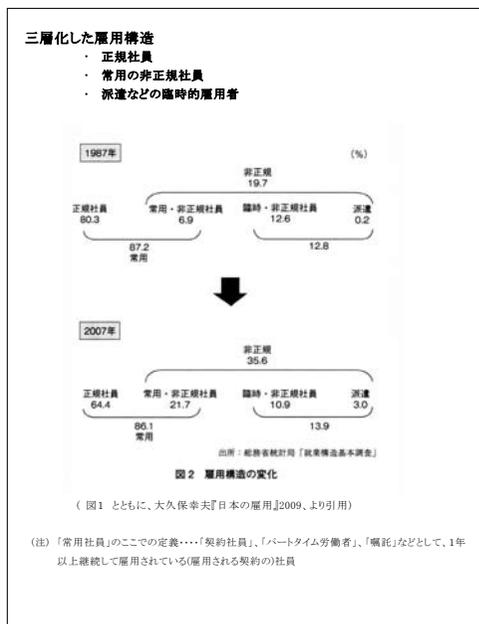
ただ、落合先生がおっしゃったように、アメリカの若者たちのたくましさというのは、一方では自分ひとりでそれこそ包丁1本で修業に出かけるというふうな心意気の若者がたくさんいるという点では羨ましいですけど、一方では先ほども言ったように現実をある意味で過剰に、過剰同調といいますか、素直に受け入れすぎているのであれば、そこにもやはり問題があるのであって、現実を批判的に見るという視点も同時に若者には持ってほしいと思います。

我田引水ですけど、少し時間をいただいて、今日お配りした私の資料の4ページ、5ページを見ていただけますでしょうか[資料-3, 4]。そこに三層化した雇用構造と書いてあ

ります。これは大久保幸夫さんの書物から引用してきたものですが、よく正規社員と非正規社員が分断されていると、日本の最近の雇用構造、雇用情勢について話されますが、現実はどこに書いてあるように1年以上の雇用契約で働いている人たちを常用社員というふうにとらえますと3階層になるのですね。いわゆる正規社員とそれから常用の非正規社員、それからそれ以外の社員、臨時あるいは派遣という社員と三つの階層に分けられます。1987年ですと正規社員が80%いたのが、今は64%ぐらいです。その分増えたのは、常用・非正規の部分であって、派遣というのは問題にされますけど、増えてはいますが0.2%から3%ですから、倍率にすれば増えているけれども、全体の雇用の割合からすると



資料-3



資料-4

少ないのだと、そういう話が出てまいります。

そこで、例えば私が学生に話したいのは、一旦大学を出て卒業する時点で正社員になれなかった若者たちが正社員になりたいと考え、企業のなかでいろいろな技術なり経営なりの知識も身につけたい、経験も積んでいきたいと思っているにもかかわらず、フリーターなり派遣なりの立場で一生を送らねばならないような社会が定着するとすれば、私はそれはちょっと許せないですね。そんな社会であってほしくない。

そこで学生にどういうことを言いたいかというと、例えば企業が、ここに出ております正社員ではないけれども、常用として1年以上雇用契約を継続して結んでいるような、そういう社員のなかから本人にもやる気があり、能力もあるという人たちを正社員に採用するような、そういう雇用システムだってあり得るのではないか。非正規は非正規でもうそのままだということではなくて、その人たちのなかから能力もあり、やる気のある、若者に限りませんが、そうした人がいれば、どんどん正社員に採用していくような、そういう中途採用といいますか、雇用のシステムを企業は考えるべきではないか。そういうようなことを私は学生に向かって言いたいと思うのです。それは一つの例ですけど、ただ現実をありのままに受け入れて、いかにそのなかで適応するかというのではなくて、違った可能性もあることを考えてほしい。先ほど申

しましたのは、そういう意味なのです。要は暗くなりがちな若者をどうやって元気にするか、あるいは前向きな明るい気持ちを持ってこれからの人生に立ち向かってもらえるか、そんな気持ちで私はいるのですけれども、どうでしょうか。

▶大谷信介 社会学部の大谷です。

何を話しているのかよくわからなくて、何のディスカッションにしたらいいいのかわからないので、題名に「大学教育としての社会学をめぐって」ということと、創立50周年の記念講演会の最終だと思うので、その点に関して少し社会学ということが、私が学生だったころから、今教えている30年近くの間で、やはり社会学は変わってきたと思うのです、その置かれてる状況が。確かにどういうふうに変わってきたのかということ、少し市民権を得てきたということだと思います。市民権を得てきたし、昔は社会学をやって何になるのという話でしたが、それがもう少しメジャーになってきた。特にそれが関学のなかでメジャーになっているということが、私は非常に大きな意味を持っていると思います。それは私学のなかで。恐らく京大だったら法学部が偉いでしょうし、東大でもそうでしょうが、その秩序は全然変わってません。医学部が偉かったり、それはなぜかということ、教育がみんなそうさせてきたからです。偏差値の教育が全然変わっていません。その点に関して言

うと、優秀な学生がみんな医学部へ行って町医者になっているというような状況をつくっているのが、日本社会だったわけです。法学部へ行って、それが全部だめになって、官僚がこうなっている状況をつくってきた。そのなかで変わってきたのは何かというと、私学のなかで650人に学生定員が増えてきた。しかも社会学部に入っても就職で困らそうだ、商学部だとか、経済学部だとか、法学部に伍して就職できるようになってきたという市民権を得てきたということは、非常に重要なことだと私は思います。

その意味で言うと、今、社会学はもっと発言力を増していかなければならない。その点について、もっと考えるべきだろうと思っています。それは簡単に言うと何なのか。政策だとよく言われますけれども、政策ではもうだめなのですね。例えば内閣府に対して一生懸命頑張ろうとして、社会調査協会でも一生懸命やったとしても人事異動が激しくて、ほとんどやったものがなくなっていく。この仕組みのなかで官僚とか政策とかでうまくいくのかというと、もう限界にきている。その意味で言うと、もっと仕組みをちゃんと考えるべきだということを、社会学は発信していかなければならない。

では、仕組みとは何なのだといったときに、社会的イマジネーションであるとか、いろいろなことを考えてみると、今日の講演に引きつけて言いますと、海外ではメイドさんを

雇うという話、落合先生はメイドさんを雇うことがいいことのように言われてました。私はあまりそう思っていない。そういったようなことについて言うと、日本では日本の仕組みがあったのだらうと思います。メイドさんを雇うということが持っている意味合いというのは、いろいろなことを含んでいます。それは移民のほうから考えたり、社会学のいろいろなところから考えて、もうちょっとやっていくべきだろうと、そういう議論をもう少ししていく必要があるのかなという気がしています。そうだとすると、もう少し社会学の発信力というのは何なのかについて、皆さんの意見をぜひ聞いてみたいと思います。

▶**安藤** 社会学の発信力は何か、要するに社会学が発信力を高めるためには何をすればいいかということでしょうか。どなたか。

▶**萬成博** 名誉教授の萬成と申しますが、社会学部の教育のなかで私が感じたことは、社会学者は本当に現実を見て、現実の一番重要な問題を適当な方法で研究していったかどうかということ。それを教えてきたかということです。私は先ほど問題に出たような、日本のもう少しビジネスリーダーシップとか、ポリティカルリーダーシップを研究するとかいうことが必要ではないかということを言われましたけれども、50年前にジャパニーズビジネスリーダー、それからポリティカル



齢者が多いとか、医療が重要になるとか、そういう社会の一部のことだけではなくて、労働力人口が相対的に減少していくとか、それからグローバル化とセットになってますから、移動が非常に当たり前になっていくとか、そういうこととセットになった問題だと思います。だから近代社会になるときに、かなり大きな変化があったと思いますけども、また今、かなり大きな変化が起きていて、そこで、ではどういう作戦を立てたらいいかということだと思うのです。でもこれだけ大きい変化になりますと、作戦が立てやすいと思います。労働力人口が減るのであれば、女性を主婦にしておくのは非効率であるとか、それから外国人が入ってこないほうがいいということはもう成り立たないとか。ヨーロッパとかでは、かなりもう外国人が入ってきています。

先ほどのお話でメイドを雇用するというのがいいかどうかというご意見がありましたけれども、私はそれがいいとは言っていないのです。ただ、それをタブーにしてはいけないと思うのです、そうした議論を。今の日本は外国人が入っているということを論じないようにしている社会で、労働者も入ってますけど、研修生とかいう名前で労働者として入れてません。でもそういう単純労働をやる人が必要なのであれば、ちゃんと労働者として入れて、労働基準法を適用して最低賃金を適用して入れていったらいいと。だから家事労働者も、もしそういうふうのできるのであれば入れて

もいいのではないかと思います。今の日本では、受け入れている外国人女性はセックスワーカーと日本人男性の妻ばかりなのですよ。メイドとして入れるならばセックスワーカーとして来なかったであろう人もいるのではないのでしょうか。だからそういうふうで考えると、全体を議論していったほうが良いと思うのです。

だから特にジェンダーと外国人という観点は大きく変わると思いますし、あと安藤先生のお話の常用・非正規社員の話ですけれども、私、そこから最後に正規社員になれる道があったら希望があるのかというと、私はそれはちょっと違うように思っています。正規社員は縮小していく傾向です。先進国は中産階級は縮小し、正規社員は縮小していく。正規社員、フルタイムの人ですね、しかしもともと女性は入ってなかったのです。そういう意味でいったら、女性たちは最初からこのシステムから排除されていたのだから、今こうなってもそれほど痛痒は感じない。だから、何か違う社会にするのもありだと思うのです。この労働のことでしたら、正規社員を目指すのではなくて、正規社員と非正規社員や派遣の人のあいだで、例えば同一価値労働同一賃金を徹底する。ヨーロッパのEU諸国ではその方向でいこうとしています。労働のフレキシブル化はいいことであると、雇用者にとっても、それから労働者にとっても、ワーク・ライフ・バランスにもなりますから。そ



ります[資料-5]。これは去年の夏に行われました社会学部の卒業生調査です。そのなかの質問でありまして、もとの質問は「大学卒業後、関西学院大学で学んだ社会学が現在までの生活のなかで役に立つことはあったでしょうか、できるだけ具体的にあなたの経験をお書きください」という、そういう自由回答に対する答えのほんの一部です。こうやって見てみますと、具体的な知識として、たとえば組織論を学んだ、あるいは広告論を学んだ、そういった具体的な知識が仕事の上で、あるいは生活の上で役に立ったという意見と、あと何と申しましょうか、教養としての社会的な物の見方とでもいいますか、社会学は社会全体を広く見渡す視点を学ぶ学問だと理解している、そういうことが役に立ったとか、社会学を学んだことで世の中の流れを感じ取ることができるようになった、というような卒業生の方々の意見もありました。

これを読んでみますと、もちろん自分の卒業した学部を悪く言う卒業生はあまりいないと思いますし、なにかしら役に立ったと思う卒業生が自由回答に書いてくれたのだと思いますから、そういったバイアスはあるにしても、ざっと見させていただくと、これまでの社会学部の先輩の皆さん、また我々も含めて、さまざまな社会学を教えてきたことがある意味、決して無駄ではなかったのではないかという気はいたします。ただ、しかしそれでもってこれからも現在の状況が続ければいいとい

うことでもないので、今日のようなディスカッションをさせていただきました。それは狭い意味での社会学部、あるいは大学だけの問題でなくて、結局、若者論というような議論にまで広がりましたし、また若者を考える場合には日本社会のあり方自体がまた問題になってくる。外国との比較をすれば、そのことが非常に明らかになってくるという落合先生のご指摘もありました。ということで、問題はどんどんと広がっていくのですけれども、そういった広がりを持った問題状況のなかで、是非これからの50年に向けて、社会学部の教員として、社会学部の教育はいかにあるべきかということを中心に頭の隅に置きながら教室で日々の仕事に励みたいというふうに思います。

なれないものですから、私の司会も拙いものであったと思いますけれども、ご静聴いただきまして誠にありがとうございました。以上をもちまして、今日のディスカッションを終わりといたします。



### 社会学が役に立つ場面 【卒業生調査 自由回答から】

・「社会学」とは何なのかを理解できずに卒業した思いが強く、今でも残念です。大学紛争の時期に在学中、落ち着いて学問することは困難でした。しかし、放送局にアナウンサーとして就職し、多くの人々との出会いを得た時に、学部で学んだことが手懸かりになって話題を広げることができた。「もの見方」「多面的分析・解釈」の大切で役立つように思う

・「社会学」が直接「役に立つ」学問として意識する場面はなかったが、社会的な見方、考え方、判断の基準などが自分を支配していたように思う。

・「社会学」という事が判らずに入学し、判ったような気分卒業した。社会に出てから社会学という事を意識する事は多い、具体的な経験という程度のものはないが、今になっても誇りである。

・「社会学」とは、社会全体を広く見渡す視点学ぶ事だと理解している。社会福祉関係の仕事をする、当事者に対するせまい視線になりがちなため、問題、課題の背景を広くとらえるよう注意しており、又、その視点や考え方は学生時代に学んだ

・「社会学」を学んだことで世の中の流れを感じ取ることができるようになり、方向性を考える上で間接的に役立っていると思う。卒業後の仕事が小売業であったため、一般的な若者文化や大衆の物の考え方をつかむこと。人事という職を行ううえで、公平公正な考え方をを行う場面でも、「社会学」を通して得たものが少なからずあったように思う。

・「社会的な考え方」が人生や仕事の中で役立っています。→Flexibleに物事が対応できることと、色々な事象の共通項から重要な事を見つけ出したり問題の解決を見つけ出すことがある。

・「組織論」を学びましたが特に就職してしばらくの間は職場の人間関係や働きかけ、効率化といったことを理解する助けになりました。公職についてので法学のいくつかの講義も法令・法規の理解の助けになりました。

・「農村社会学」のゼミでしたので、その内容が具体的に役立ったということはないかと思いますが、資料の分析の方法は業務、家事の中でも応用できるものだったと思います。もちろん教養としては十分に役立っていますし、Y先生と読み進めた古文書の読み方は今でも覚えていてます。

・「マスコミュニケーション論」を始め、広告的アプローチの学習は就業後のマーケティング戦略に役立った。

・「モノを考える」クセがついた様に思います。一般の人は表面的な事しか興味が無く、自分の利益にならない事にはエネルギーを使わないという傾向ですが、「なぜこうなのか」と深い所まで考えてしまうところは社会学卒業生に共通しているのでは・・・。

・「経済学」的な物の見方がない、物の見方ができた事。会社組織を分析する場合、「社会学」的知識は有効。市場原理主義を批判評価できるのは「社会学」と実感した事。市場分析に社会調査の手法は有効であった。

・「自由からの逃走」と「菊と刀」はノートをとって読んだ本です。開学の社会学部のことなど何も知らず、ただ私達の世代は大学に入ることだけを目指していましたが、志望の大学に入れなかった私は目標を失ったようで勉強にも怠けていました。ただこの2冊だけを読んだことは「真理」というものにふれたという財産となっています。この本を読むことを強制してくださった外書購読の先生に感謝しています。

・「社会学」が何で在るか、未だに確たる一言はありませんが・・・。社会との係わりを夫々の出来事で考えると、人生の節目節目で「社会学」で学んだことを思い起こし、検証をすることで、大役に立ったと思っております。Dゼミでの「都市社会学」は仕事での拠点展開、商工会議所との都市計画策定等で、大役立ちました。又、会社内での人事問題で、カウンセリング等、心理学の部分でも、昔の参考書を引っ張り出して勉強する等、幅広い分野で役に立ったと思っております。(学生時代は全く勉強していなかったものの、学んだ断片から、深く再勉強することが出来ました。)

・「社会学」が役に立った経験はありません。(残念ながら・・・)

・「社会学」そのものが役に立つというのではなく、開学を卒業したという事で役に立った事がある。

・「社会学」というか、ゼミで習った統計やアンケートの質問表の作成などが、日本語(及び中国語)の教授の際に、練習問題として応用することができた。

・「社会学」というのは、一番私達社会生活に密着した、身近な学問だと思う。私にとってはゼミで学んだ「意思決定」のあり方が、常に考え方の根底にあると感じている。開学で学んだことを活かすかどうかは自分の生き方次第。いろんなことに興味、疑問を持ち、「知りたい」と思い、向上していきたい。

## 資料-5